

政務活動報告

平成30年4月24日～4月25日

自治体議員フォーラム栃木と連合議員懇談会共催

東日本大震災から復興の仙台市を視察

マグニチュード9.0、最大震度7、津波の高さ約7.1m、3分以上の揺れ、死者904名、行方不明26名、負傷者2,275名、被害の程度が「危険」または「要注意」と確認された宅地5,728宅地、津波浸水被害8,110世帯、被害推計は約1兆3,829億円。それから7年が経過した。

復興に向けて4つの方向性を定めて取り組みをした。

- ① 減災を基本とする防災の再構築
- ② エネルギー課題等への対応
- ③ 自助・自立と共同・支え合いによる復興
- ④ 東北復興の力となる経済・都市活力の創造

住まいの再建では、防災集団移転、被災宅地の復旧、復興公営住宅の整備を実施した。教訓として、津波対策として、海岸堤防・海岸防災林・かさ上げ道路など多重防御、避難タワー計13か所と非難の丘4か所、安全な内陸部への集団移転を実施し、防災から減災へ新たな取り組みをした。さらに、自主防災組織を結成、仙台市地域防災リーダーの養成、地域版避難所運営マニュアル作成、企業との連携による帰宅困難者対策等コミュニティの防災力強化を行った。そして、過去にも大津波に襲われた歴史を持っている(海岸から約5kmの津波到達地点の伝承が残る浪分神社)ため、震災の記録や記憶を未来へつなぐ事業に取りくんだ。

東日本大震災仙台市震災記録誌5,000部、復興5年記録誌4,000部を作成し全国すべての自治体に配布した。2年前の熊本地震の際には仙台市の担当課に調節連絡できるよう事業ごとの担当課一覧を添付しフル活用された。



荒浜小学校における、地震発生から避難、津波の襲来、そして救助されるまでの経過を写真や映像で残し、震災遺構として伝えている。津波が2階まで襲ってきた時刻のまま止まってしまった時計や津波の脅威にさらされた子どもたちを思うと切なくなってくる。幸いなことに、避難物資は体育館から3階の教室に移していたため使うことができたという。荒浜小学校周辺ではかさ上げ道路の整備や海岸堤防整備、宅地整備の工事車両が行きかっていた。まだまだ、爪痕は回復されていない。



備蓄物資の拡大(電源や高齢・女性への物資)、配送拠点整備、家庭や企業での備蓄、防災・減災の啓発・教育のため、6月、9月、11月に総合防災訓練を実施し、学校での防災教育を行っている。

平成30年4月26日～4月27日

全国自治体議員行財政研究会視察に参加

宇都宮市のまちづくりと小山市の子どもの居場所と渡良瀬遊水地を視察

宇都宮市

宇都宮まちづくり推進機構の魅力ある中心市街地の活性化について

中心部を流れている釜川を素材とした春夏秋冬の取り組み

春 桜まつり 夏 アユのつかみ取り

秋 ウォーキング 冬 イルミネーション

宇都宮市の委託を受け、街づくり委員会を立ち上げ、大谷石蔵を素材とした石蔵バンクを設立。

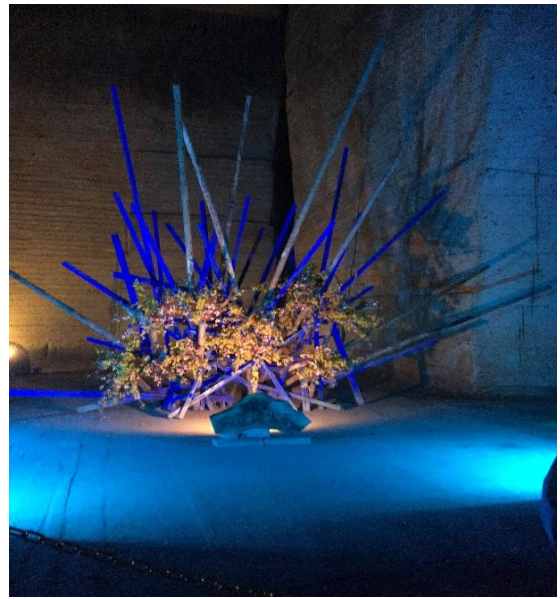
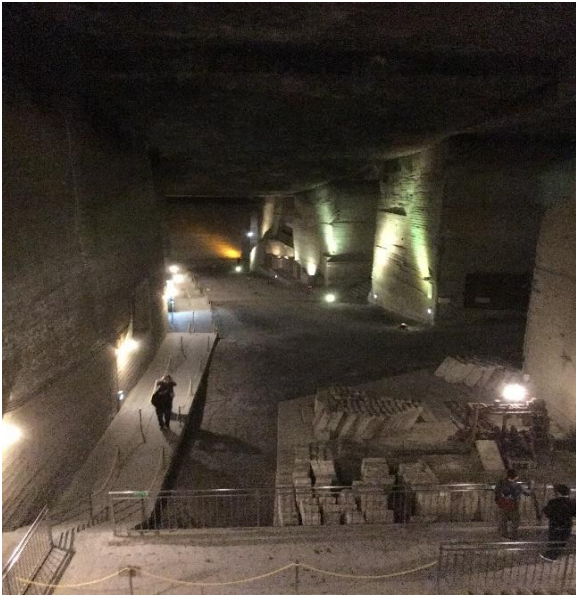
宇都宮市全体で330戸の石蔵がある。そのうち130戸が中心市街地にある。しかし、倉庫としての位置づけの為、住宅の奥まったところにあるため、価値を見出さないものとされ、持ち主の高齢化の伴い1～2割減ってきている。何とか特色ある街づくりのために、残すべき大切なものとして大谷石蔵を活用できないかと市の建築士協会が、歴史的建物活用特別委員会を立ち上げ2006年に調査。その後、「うつのみや石蔵バンク」の仕組みを作り、大谷石蔵所有者から登録をお願いし、借り手使用希望者を募り、保存活用を行ってきた。現在4件の活用にとどまっているが、レストラン、起業家を支援するシェアスペースなどに利用されている。街中に信じられない落ち着きを感じるスペースとなっている。今後の活動に期待。

江戸時代に宇都宮は豊富な湧き水があり、主な湧き水を「宇都宮七水」と呼んでいた。街中に酒造会社がある。酒造会社の大谷石蔵は今でも倉庫として使われていることから、地下の水脈を重要視し、自然を生かした緑の木々を育て、そこに憩う人たちが、街中で時間を過ごすことができる街づくりができれば特色あるものになるのではないかと。そこで大谷石蔵が大きな役割を担うのではないかと視察を終えて思った。

※江戸時代の人々は、主な湧き水七つを選んで、「七水」これとあわせて「七木」「八河原」などを選んで名所とした。



街中を視察後、神秘的な巨大地下空間大谷石の歴史が学べる資料館に向かった。



小山市

子どもの貧困対策について

子どもの養育放棄や貧困等の状況にある子供を対象に、放課後に家庭的な居場所を提供し、安心できる大人との交流を通し保護者の子育てを補助し、食事や入浴などの健全な家庭生活を経験することで、成長と自立を促し虐待の世代間連鎖の防止をする、子どもの居場所「おひさま」を運営しているNPO法人子どもの育ちを支える会さくらネット小山を視察。

当たり前が送ることのできるスペース。今日の夕食の献立が書いてあるキッチン。子どもたちのワイワイガヤガヤが目映る。昨年は中学3年生2人が学悠館高校(昼夜間の三部からなる定時制・通信課程の単位制高校)に進学。2名は一時保護の後に児童養護施設に入所となった。



小山市子育て包括支援課

平成26年5月の下野新聞の「貧困の中の子ども」の小山市内の貧困家庭の記事から小山市の重点課題と位置づけ、平成27年3月に小山市「子どもの貧困撲滅5か年計画」を策定し、早期発見、生活支援、教育支援、就労支援、経済的支援、支援体制の整備・充実の方針に基づき、53事業を進めている。平成30年度は、子供の貧困実態調査を実施する。実態に即した指標と目標値をたてる。実態調査は必要である。そこからきめ細かな支援策が図られる。大いに期待する。本来であれば、県全体の実態調査をするべきである。



ラムサール条約登録湿地 渡良瀬遊水地

栃木、茨城、群馬、埼玉の4県にまたがる面積3,300haの湿地であり、治水の要として首都圏の生命・財産を守っている。また、チュウヒをはじめとする絶滅危惧種183種を含む貴重な動植物が生息・生育する「自然の宝庫」となっている。小山市は渡良瀬遊水地第2調節池の約300haを有しており、小山市の宝でありブランドでもある。渡良瀬遊水地関連振興5か年計画の3本柱は、①治水機能を最優先、②環境にやさしい農業と地場産業の推進、③コウノトリ・トキの野生復帰

治水 渡良瀬川・思川・巴波川の3河川の水位上昇時に、ある一定レベルを超えると。河川水が遊水地内に流れ込む。これにより、下流域(利根川)への水位上昇を抑えている。

環境 冬場も水を張っておき、微生物や小魚などの自然の力を借りる無農薬・無化学肥料の稲作農法「ふゆみずたんぼ」を行っている。「ラムサールふゆみずたんぼ米」有機農法の専門家から学び、田植えの時期を工夫、米ぬかや油粕など試行。収量をどう増やすか、販路拡大の課題もある。

生物多様 植物1,000種(絶滅危惧種約60)、野鳥259種(絶滅危惧種44)、昆虫1,700種(絶滅危惧種62)と多数の動植物が生息・生育しており、生物多様性の宝庫となっている。周辺を「ふゆみずたんぼ」農地など恵まれた環境にして、トキ、コウノトリが舞う環境づくり。千葉県野田市で生まれたコウノトリ雄の「ひかる」が飛来し、人口巣塔の頂上に小枝や草を運び始めた。

谷中村史跡をガイドの門馬氏に案内を受け、谷中村役場跡、雷電神社跡、延命院跡、共同墓地跡を視察した。



恵まれた自然を活かしていくために様々な取り組みを行っている。